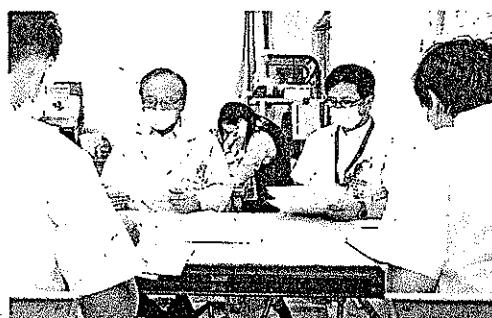


8/14 月曜

10~30代 感染急増



新型コロナ

病床逼迫 後遺症懸念 敦賀病院に聞く

新型コロナウイルスの「第五波」で、県内での感染はワクチン接種が進んだ高齢者への広がりは抑えられている一方で、十代から五十代の患者が急増している。敦賀市を中心に患者を受け入れる同市の教賀病院では病床が逼迫し、危機感を募らせる。コロナ病棟を統括する診療部長の五十嵐一誠さんと病院事務管理の米島学さんに話を聞いた。』

ナ関連③④⑤⑥⑦面

五十嵐さんは「六十五歳以上の中には十分の一定程度になった。感染のメインなักษつが変わってきた」と実感する。七月二十七日からの一週間で、県が市内の感染者として発表したのは計八十人にじる。このうち十九二十代が計五十人と大半を占め、四十一五十代

(高野正憲)

も計一千人多い。敦賀病院では今月二日に感染症病床を八床から十二床に増やした。しかし、二日後には満床となり、米島さんは「患者を出してもすぐに入ってくる」と感づく。「変異株の感染が広がってから四十、五十代

に増えた」(五十嵐さん)

と毒性が強くなった印象だ。十代から三十代では無

い状が多いものの、症状が

出る人は三八度を超える発熱が感染して数日あり、咽頭痛、鼻水、せきが続く。

まれに味覚・嗅覚障害もある。

「基礎疾患のある人や

肥満、妊娠の人は、若くて

も重症化しやすい」

若い世代でも懸念されるのが後遺症。病院が十一三

十代の感染した入院患者に

退院後、聞き取り調査をし

が必要な中等症以下の状態に

なっても、地方の病院の設

備でも粘って回復を待つこ

とができる」と話す。

人に後遺症があった。三十代女性は耳鳴りと嗅覚障害を発症し、半年以上続く。十代女性は三七度五分の微熱が二週間続いた。別に十代女性も嗅覚障害が半年以上残る。「十代男性も嗅覚障害が一ヶ月あった。

一方で、コロナの治療法が進むなど明るい兆しある。

抗ウイルス薬レムデシビルや重症化を防ぐ新治療

薬の抗体カクテル療法など

が効果を上げている。五十嵐さんは「治療法は良くなつた。呼吸不全で酸素吸入

が必要な中等症以下の状態に

なっても、地方の病院の設

備でも粘って回復を待つこ

とができる」と話す。

いずれも入院しながらの治療になる。感染拡大で満

床になり、入院できなくな

る医療崩壊を起さないこ

とが重要になつてくる。

「中等症で自己待機は本當に危ない。必ず死ぬ人が出る」と米島さんは強く訴える。中等症以下の状態に陥れば、半日くらいで人工呼吸器が必要になるほど悪化する可能性がある。

感染者を増やさないためには、若い世代のワクチン接種を進めて集団免疫を高めることが鍵になる。米島

さんは「自分の感染を防ぐこともあるが、周りに感染させないよう接種して」と呼び掛ける。